

京都丸山に倣ひたるなるべし、此者夫婦人の機をみる才ありて、玄かも好事なりしゆゑ。其住居二間の床、高麗縁なげし入り、側付を廣座敷とし、二の間三の間に座しきをかこひ、中の小亭、又は數奇屋鞠場まであり、庭中は推して玄るべし、雲州の御隱居南海殿、おなじく御當主の御次男雪川殿、玄ばく爰に遊び給へり、此兩殿は其比の大名の通人なり、雪川殿のかくし紋、☰此の如く川といふ字の羽織、名あるたいこ持は著ざるはなし、升屋祝阿彌、件のごとき大家ゆゑ、諸家の留守居者の振舞といふ事、みな升屋を定席とせり、其繁昌今比すべきなし、廣座敷に望陀覽の三字を鑄物になし、地は呂色、縁は蒔繪、四角に象眼のかな物、額長さ六尺ばかり、裏書漢文にて南海君の祝阿彌へ賜ふゆゑよし、二百字ばかり記しあり、嗚呼盛唐の宮閣も亡ぶる時あり、此額近ごろ質の流れを買ひしとて、或人の家にて見しが、後に聞けば、今の白猿に與へるとぞいひし、天明に礎せ、りの通人が遊ぶ料理茶屋、葛西太郎隅田川より秋葉へ往く、太黒屋孫四郎同所、甲子屋眞四季庵洲、二軒茶屋深川八幡境内、百川室町

〔塵塚談 下〕四谷堀の内祖師、我等○小川顯道三十歳比迄は、地名をしれる人もなかりしに、近頃に至り、祖師堂はもちらん、堂宇の設も伽藍の如くに造建し、新宿より寺の門前迄、水茶屋料理茶屋、其外酒食の店、數百間簷をならぶ。

〔京都午睡三編上〕貨食屋などは、年々歲々の流行あれば、然と定規には言難けれど、當時名高きは深川八幡前平清、八幡社地に二軒茶屋、向ふ島に大七、武藏屋、平岩、昔葛西太郎、小倉庵、今戸に金波樓、大七出店川口、通り名也、橋場に柳屋、尾花屋、柳屋仲丁の女、甲子屋、千束に田川屋、駐春亭、兩國柳橋に梅川、万八、是は書畫會舞、玄治店に杉板、爰らを上の分として、中分に繁榮なる料理屋頗る多し、青物丁讀岐屋、下谷の濱田屋、同鴈鍋、王子の海老屋、扇屋雜司谷に茗荷屋、淺草に万年屋、鰻屋にて極々上々筋違見付外深川屋、駒形の中村屋、鳥越の重箱鰻、淺草奴鰻、水道橋鰻屋、南で狐鰻、尾張